

宗教学史叙述とは何か

—〈ティーレ宗教学〉の宗教史的文脈を手掛かりに—

久保田 浩

0) 問題の所在

学問的宗教研究が自らの歴史を叙述する契機は何であろうか。「宗教学」という名称の下でこの学問分野が制度化している（例えば、現在の）状況下では、概説書や入門講義等でその成立と展開に言及されることもあろう。その際、「一般宗教史」「比較宗教学」^①及びそれに類する科目や講座の設置を巡る学問制度史が語られることもあろうし、学問制度化される以前の思想史的文脈に着目して、近代宗教学の成立の淵源を啓蒙主義或いはロマン主義に同定しつつ、宗教学史が叙述されることもあろうし、また、学説史の名の下、制度化以後の諸宗教理論並びに方法論の史的展開が語られることも多いであろう。

本稿で論ずるのは、既に学問制度化した状況に立脚して、そこから遡って描き出される宗教学の制度史的、思想史的、学説史的展開ではない。そうした宗教学史は、現状の（ある特定の）宗教学が自己を確認する作業である。換言すれば、現状の（望ましい、或いは望ましくない）宗教学に至る、（評価すべき、或いは克服されるべき）歴史的経緯を構築し、それによってその（より良き）将来的方向性を指し示すための戦略でもある^②。本稿ではまず、そうした自己確認的歴史叙述が、何を、誰を、どのような根拠に基づいて近代宗教学の起源と見做してきたか、見做しているかを出発点として、そうした「宗教学起源論」を再考するひとつの視点を提供することを目的とする。

宗教学起源論が自己確認的歴史叙述という性格を帯びていることの好例は、1991年にドナルド・ウィーベが認めたヘラルデウス・ファン・デル・レーウ論^③に看取れる。そこでウィーベは、「ティーレは明らかに宗教学を神学と区別しており、一方ファン・デル・レーウはそれらを区別していないか、少なくとも明瞭には区別していない。[宗教の歴史研究や経験的研究等の]諸学問はファン・デル・レーウにとっては神学の準備段階であるのに対して、ティーレにとって宗教学は……宗教の発展とその法則を説明することを求めるものである」と述べ、コルネリス・ペトリュス・ティーレの「科学的宗教学」をファン・デル・レーウの「神学的宗教学」と対比させ、宗教学の歴史において後者によって前者が転覆させられ、破壊されたと指摘する。レーウの所謂宗教現象学の神学的・非科学的傾向を糾弾する本論文の根底には、現在の科学的であるはずの宗教学の立場から、一方で宗教学の創成期において本来科学的であったはずのティーレの宗教学と、他方でその後の宗教現象学という名称の下で遂行された神学的・非科学的な営みとの間に対立図式を描き、その図式に基づいて、現在の宗教学が依拠すべき科学性を回復する為に、宗教学が本来有していたとされる科学性を強調するという自己言及的な記述となっている。

ここでウィーベの論考に言及した理由は、それが自己確認的戦略の好例であるのみならず、20世紀を通して描かれてきた宗教学史のプロトタイプの一つでもあるからである。わたしたち 21 世紀

初頭の自称宗教学者が慣れ親しんでいる宗教学史叙述の一つは、1975年に刊行されたエリック・J・シャープの手になるものであろう。そこで彼は、「比較宗教(学)の祖」と呼び得る研究者は厳密には二人しかいないとして、フリードリヒ・マックス・ミュラーとティーレの名を挙げている⁽⁴⁾。宗教学の歴史的起源をこの二人の経験科学的性格に求めるような歴史叙述がその後継承される一方で、それは、ヨアヒム・ヴァッハが提示した、「形而上学的」或いは「思弁的」とされた「神学」からの「宗教学の解放」という物語⁽⁵⁾と連動して、宗教学の非神学性・経験科学性が自明視されていくことになる。

しかし、シャープの宗教学史叙述の70年前の1905年に刊行されたルイス・H・ジョーダンの宗教学史叙述においては、マックス・ミュラーこそが宗教学の祖であるという通説が「奇異な妄想」として真っ向から否定されている⁽⁶⁾。ジョーダンは、19世紀前半の学問的展開を緻密に跡付けた結論として、更に、マックス・ミュラー自身が新たな学問分野の祖であることを否認していることを引き合いに出しつつ、ティーレの以下の評価に同意している。即ち、ミュラーはこの学問に対する予備的な準備をしたに過ぎず⁽⁷⁾、宗教学は「同時期に様々な国において感じられていたある一般的な要請によって、当然の成り行きとして成立したのである」⁽⁸⁾。

1975年のシャープの見立てと1905年のジョーダンの評価は共に、ミュラーとティーレの名を挙げながらも、叙述構成は大きく異なっている。両者が下している評価の齟齬は、多くの興味深い点を示唆しているが⁽⁹⁾、その一つはその都度の時代の宗教学の制度化の程度とそれに応じた自己像の相違であろう。1975年には、極めて簡略な前史を述べた後、マックス・ミュラーから比較宗教学の歴史を説き起こすことを可能にするような制度的基盤が既に存在していたのに対し、1905年には、宗教学史の冒頭の3分の1に当たる部分で、ミュラーとティーレ以前を詳述することによって、宗教学が19世紀的近代学問の嫡子であることを弁明する必要があった。つまり、ジョーダンの宗教学史叙述は、確立した宗教学の視座からの遡及的自己確認的作業では未だない。1905年の時点での宗教学の自己理解は、1975年のシャープのそれとも、況や1991年のウィーベのそれとも異なり、ミュラーとティーレ以前の、そして彼らと同時代の諸々の学問分野の自己形成過程、即ち19世紀的学問(特に自然諸科学を参照枠としつつ形成されてきた人文諸科学)の形成過程という歴史的文脈の中に位置しているのである⁽¹⁰⁾。

以下では、こうした観点から、これまで繰り返し名が挙げられてきた「宗教学の祖」の一人とされるティーレに着目し、彼の「宗教学」を当時のオランダの歴史的文脈に据えてみる。そしてそれによって、制度化した自己の確認作業としての宗教学史叙述の認識枠組みに囚われてしまっているティーレを宗教学から一旦解放して分析することを試みる。具体的には、当時のオランダにおいて宗教を学問的に論じる場がどのような場所として形成されていたのか、或いは形成されるべきとされていたのか—先程のティーレの同時代診断の言葉を借りれば、どのような「一般的な要請」があったのか—という問いを立て、〈ティーレ宗教学〉の神学史的並びに神学に関わる文教政策的文脈⁽¹¹⁾—これは、冒頭のウィーベに代表されるような自己確認的歴史叙述からは排除されるきらいがあった—を、そしてこの宗教学「揺籃期」において援用された多様な出自を持つ諸概念の使用様態を検討していく⁽¹²⁾。

1) 神学史的な文脈における〈ティーレ宗教学〉の成立

ティーレが「宗教学の祖」の一人と言われるようになったのには勿論それ相応の根拠がある。それは本稿末尾の参考資料に記した、彼の履歴ならびに業績一覧を一瞥すれば容易に確認できる。しかし以下で着目するのは、シャープが指摘しているように⁽¹³⁾、ティーレもミュラーと同様にプロテスタント自由主義神学を背景にして登場してきた人物であり、ミュラー以上に直接的に神学との関係の中で宗教学を構想していた人物である点である。

a) 神学的モダニズムとティーレ⁽¹⁴⁾

C・P・ティーレ (Cornelis Petrus Tiele, 1830-1902) は、レモンストラント兄弟団 (アルミニウス派) の聖職者・神学者であった。レモンストラント派は、神による救済の業における人間の自由意思の関与を巡って、17世紀初頭に開かれた改革派のドルトレヒト会議で拒絶された一派である。改革派を多数派とするオランダにおいて、ローマ・カトリック、ルター派、メノナイト派と並んでレモンストラント派も宗教的少数派を形成していた。19世紀後半のオランダにおけるレモンストラント派は、体制派のオランダ改革派教会 (Nederlandsche Hervormde Kerk) 内部の保守化の傾向に満足しない一派の流入によって、若干の勢力拡大の傾向にあったものの、世紀全体を通して、立憲君主制を支える保守的知識人階層から成る少数派に留まっていた。

オランダにおいて宗教的にも政治的にも確立していたカルヴィニズムが大きく変容してくるのは19世紀初頭のことである。それは当時オランダのみならず西欧のプロテスタンティズムを席卷していた自由主義神学の影響であった。この宗教的・精神的運動は各地で様々な名称で呼ばれ、また様々な学者の名前と繋げて捉えられていたが⁽¹⁵⁾、オランダでは「モデルニズメ modernisme」(モダニズム) と呼ばれ、ライデン大学神学部がその牙城であった。ティーレ自身はオランダ改革派教会と一定の距離を取るレモンストラント兄弟団の聖職者・神学者であり、1853年にレモンストラント兄弟団の神学校を出た後、兄弟団の牧師として活動し、73年には兄弟団の神学校の教授(後には学長)として活躍した人物であったが、兄弟団をモダニズムの方向に導いていき、レモンストラント派の枠を越えて、オランダ改革派教会内部のスホルテン (Joannes Henricus Scholten, 1811-1885) やキューネン (Abraham Kuenen, 1828-1891) 等と並ぶモダニスト神学者の一人として名を馳せていた⁽¹⁶⁾。

聖書の歴史的・批判的研究に基づく「人間イエス」を現代的精神に相応したキリスト教信仰の核心に据えようとしたこの国際的思想・宗教運動はしかし、正統主義キリスト教が立脚する超自然主義的教義を否定したが、こうした脱教義化の傾向は人々の教会離れ、信仰の喪失を助長する可能性をも秘めていたと言える。シュトラウスやルナン自身が最終的にキリスト教信仰と決別したことは周知の通りである。そこで引き合いに出されることとなったのが、あらゆる人間に内在する宗教性とそこから自然的に生ずる信仰という考えであった⁽¹⁷⁾。

こうした事情は例えばティーレによって以下のように捉えられている。同時代の一般信徒は既に成人であり、即ち学問研究に慣れ親しんでいる現代人であり、学問研究の是非を自ら判断し得る能力を有している。従って一般信徒に対して、歴史的・文献学的聖書批判の成果を提供すべきである。信徒が別の経路を通して聖書批判の成果についての情報を得たならば、寧ろそれこそが信徒の信仰喪失を一そして近代学問としての神学への不信を一惹起しかねない。換言すれば、歴史的・文献学

的聖書批判を学問的即ち「科学」的成果として信徒に向けて提供することが出来れば、信徒はこうした「科学」つまりモダニズム神学を受け入れるであろうし、自由主義的に理解されたキリスト教は、近代人の宗教性とも、それに応じた信仰形態とも矛盾しない、という訳である⁽¹⁸⁾。つまり、あらゆる人間に内在する宗教性とそこから自然に生ずる信仰という、モダニズム神学による宗教の内面化と自然化は、批判にさらされたモダニズム神学の自己弁護の手段でもあった。従って、モダニズム神学とは端的に言えば、近代科学に適合した宗教、そして宗教に適合した科学の構築の試みであった。ティーレが60年代以降、その確立に尽力する「宗教学 *een godsdienstwetenschap*」つまり「科学的神学 *een wetenschappelijke godgeleerdheid/theologie*」の構想は、こうした文脈の中に位置しているのである。

b) 「二重構造」としての大学神学部と「一般宗教史」教授ティーレの誕生

ティーレは1860年代に国立大学における神学部と彼の説く「宗教学」との関係について積極的に論じていくようになるが、その直接的な文脈は、当時の国立大学における神学部を巡る文教政策的論争であった。

66年以降、内務省主導の下、中高等教育再編案が議論されていたが、幾多の紆余曲折を経て最終的に76年に高等教育法の制定によって決着することになる⁽¹⁹⁾。大きな争点のひとつは国立大学における神学部の再編であった。この時期のネーデルラント王国は、特に1848年革命後の憲法改正においてローマ・カトリック教徒に対する教会組織化の自由化等に見られる自由主義化の流れの中で、国立大学における神学部の位置付けが改めて問題視されていたのである。議論は、一方ではそれまでの伝統的な神学部、つまり国家体制と一体化しているオランダ改革派教会の聖職者養成を主たる目的とする教育機関であり続けることを要求する声と、他方で近代的な学問理解に基づいて神学部の廃止を求める声の両極の間で展開していった。最終的には折衷的な解決が図られることとなったが、神学部を存続させるにしても、聖職者養成と学問的研究のどちらに重点が置かれるべきなのか、学部の名称を変更する必要があるのか、そしてその学部でどのような講座が設置され、どのような科目が提供されるのか、という点を巡って議論が紛糾した。可決されることになる最終案では、国立大学における四つの神学部（ライデン、アムステルダム、ユトレヒト、フローニンゲン）は、国家が任命する「科学的」神学を講じる学者と、オランダ改革派教会が任命する「教会的」神学を講じる学者による折衷的な二重構造システム（*duplex ordo*）として再編され、後者が担当する教義学と実践神学の「教会的」科目以外は前者によって教授されることとなった。制定された高等教育法に基づき、神学部において教授されることとなった科目名は以下の通りである（9と12が所謂「教会的神学」科目、その他が「科学的神学」科目。3が新設）⁽²⁰⁾。

1. de encyclopedie der godgeleerdheid（神学緒論）
2. de geschiedenis der leer aangaande God（神論史）
3. de geschiedenis der godsdiensten in het algemeen（一般宗教史＝諸宗教一般の歴史）
4. de geschiedenis van de israëlitische godsdienst（イスラエル宗教史）
5. de geschiedenis van het christendom（キリスト教史）
6. de israëlitische en oud-christelijke letterkunde（イスラエル・初期キリスト教文献学）

7. de uitlegging van het Oud en Nieuw Testament (旧新約聖書釈義)
8. de geschiedenis der leerstelling van de christelijke godsdienst (キリスト教教理史)
9. de leerstellige godgeleerdheid (教義学)
10. de wijsbegeerte van de godsdienst (宗教哲学)
11. de zedekunde (倫理学)
12. de praktische godgeleerdheid (実践神学)

ティーレはライデン大学神学部に 1877 年に就任することになるが、それはまさに、同年に施行されたこの新法に基づく教員配置人事の結果である。こうして彼は「科学的神学」の枠内で構想され、かつ新設された「一般宗教史 (= 諸宗教一般の歴史)」の教授となるのである。これが従来の宗教学史叙述においてオランダ宗教学の制度的事始めと見做されている出来事である。ティーレはライデン大学において、「一般宗教史」のみならず、1891 年までは「神論史」、それ以後は「宗教哲学」も教授している。因みに、シャントピー・ド・ラ・ソーセイのアムステルダム大学神学部「一般宗教史」教授への就任も同じ人事措置によるものである (しかし彼は 99 年にライデン大学に移籍し、「一般宗教史」は教授せず、「神論史」と「倫理学」の担当となる)⁽²¹⁾。

2) 「宗教学」 — 「神学」の完成体

a) 「宗教学」としての「神学」

以上概略した文脈において 1860, 70 年代に構想され始めたのが〈ティーレ宗教学〉である⁽²²⁾。

60 年代初頭、ティーレは「宗教史 de geschiedenis der godsdienst [(単数形の) 宗教の歴史] ……がその重要な一部を構成していないような科学的神学など想像することができない」⁽²³⁾と主張し、モダニズム神学の中心地であったライデン大学神学部における宗教史研究の不備を指摘し、当時のモダニズム神学における伝播論的な個別宗教史叙述に対し、単数形の「宗教」の歴史のかつ心理的発展の法則を解明するための前提として「比較宗教史 de vergelijkende geschiedenis der godsdiensten [諸宗教の比較史]」を対置している⁽²⁴⁾。

その後、彼の宗教学の構想と提言は、国立大学神学部の改編が議論されていた最中に活発化する⁽²⁵⁾。彼の出発点にあったのは、現状の神学に対する猜疑の念である。彼は以下のように同時代の神学に対する診断、そしてその回復への見込みについて述べる。現代の社会的進展と学問的発展に直面して、「神学は救うすべもなく、回復の見込みのないものになってしまうのだろうか。その将来は、[ローマ・カトリック教会の修道院に設置されているような]神学教育機関に見られる日暮れの薄明か、或いは修道院の暗闇のようなものになってしまうのであろうか。わたしにはそうは思えない。わたしは神学をこの茫漠とした状況から救い出す道がひとつあると確信している。それはただ、安全ではあるが厳密さに欠ける傾向から脱して、ひとつの科学と呼び得るようなものになることによってである。しかし、この名前をただ単に冠しているだけでなく、その名前を勝ち取ることによってである」⁽²⁶⁾。そして神学にこの「科学 wetenschap」性を担保してくれるものが「宗教学 godsdienstwetenschap」であるとされる。現状の神学は「わずかの文献学、わずかの宗教史、わず

かの哲学、わずかの弁論術[説教学]、わずかの心理学、わずかの芸術論等々」が有機的に統合されない状態にある寄せ集めである。それらを結びつけていたのはただ、「歴代教皇、神学者達、使徒達、福音書記者達が無謬であることへの信仰、或いは結局は同じことであるが、超自然的（超感覚的、の意味ではない）啓示への信仰」であったが、その信憑性が失われてしまった現在、人々は「その下部諸分野が内的な共通性によって連関しておらず、単に外的な意味付け[教会]によって束ね合わされているような科学など存続し得ないと感じ始めている」(27)。

こうした事態に直面して、例えばシュライエルマッハーは神学を近代化した。しかし、彼が行ったように、神学をキリスト教会という特定の宗教共同体との関係を通してのみ体系化されるような諸分野の統一体として、しかも「実証的 *pozitief*」科学であると特徴づけることは、ティーレから見れば、神学がまさに外的な権威に依存していることの証左に他ならず、最早それを「科学」と呼ぶことはできない(28)。ティーレの批判の矛先は更に、ヘーゲルの発展段階的宗教哲学の影響下にある神学者に対しても向けられる。そうした神学が自らを、実定的に (*pozitief*) 存在するひとつの「宗教」を研究する学問であると自己主張をする際、特定の「キリスト教会」の理念形態が「宗教」そのものへとすり替えられている。けれども、「神学を真に、[単数形の]宗教の科学にするためには、あらゆる宗教が科学的探求の枠内に引き受けられるのが当然である」(29)。つまり、ティーレによれば、シュライエルマッハーやヘーゲル主義的神学に見られる問題点は、他宗教との比較の観点の欠如、ユダヤ・キリスト教以外の諸宗教の歴史的展開に関する知識の欠如、思弁的方法の三つである、ということになる(30)。

このような評価からすれば、この三つの欠陥を克服した、或いは克服しつつあると彼が判断した比較言語学、比較神話学、民俗学研究、歴史的・批判的文献学研究等が体现している比較研究、歴史研究、実証的研究という三つの特徴を兼ね備えた「(単数形の) 宗教についての一般学 *de algemeene wetenschap der godsdienst*」こそが、真の意味での「神学」であることになる。こうしてティーレによれば、「宗教学」と「科学的神学」が「不可分に結合して、ひとつの全体となって漸く、両者の協働の下、諸々の宗教形態と宗教現象の研究と比較を通して、[単数形の]宗教自体に関する知識へと到達できる」のである(31)。

b) 「神学」としての「宗教学」

ティーレにとって宗教は人間精神の産物である故に(32)、宗教学は「人間学」に、そしてその下位分野である「心理学」に属すが、その一方で完全に自立した科学でもある。この学問の特徴についてティーレは以下のように述べている。「宗教」の「統一性は精神に由来する特徴であり、すべての人間に共通しているものである」(33)。即ち、人間精神の産物としての「宗教」は、言語活動と美的感覚に深く関係するものであるが、感情に促された、抗うことの出来ない欲求と深く繋がっている点こそが、他の精神的現象との相違であり、その相違に応じた科学的取り扱いが必要になるとされる。それは「宗教的人間の本性[自然]の観察に基づき、観察を通して宗教の形成と発展を支配している法則を発見するという意味において、つまり通常の、限定された意味においてではなく、最も広い意味において、自然科学である」(34)。この「法則」とは、「人間の本性[自然]の中に書き込まれており、真の信仰者は知ることなくそれに従っている」ようなものであり、「宗教」はそれに応じて、「宗教的感情の欲求から生じた自然的成長」の過程を経るとされている(35)。

こうした「心理学」としての宗教学は、対象の観点から、第一部の歴史学的研究、即ち「宗教史の哲学」と、第二部の狭義の心理学的研究、つまり「宗教的人間に関する哲学」の二つの分野に分けられている⁽³⁶⁾。前者は「宗教」の「諸形式」の研究で、後者は「宗教」の「本質」と「起源」の研究であるとされている。その全体像を要約すれば、以下ようになる⁽³⁷⁾。

宗教学第一部 「宗教史の哲学」(宗教の「諸形式」についての歴史的研究)

【第一分野】系譜学的比較

神名、神話、教義、慣習等の多様な宗教形式の類縁関係の解明。比較言語学をモデルとし、例えば神名や神話的モチーフ等の特定の形式の伝播を時間的かつ地理的観点から解明し、それぞれの形式を分類(家族関係の解明)することで、変容の法則を明らかにする。「宗教学の古生物学」部門と呼び得る。

【第二分野】形態論的比較

諸宗教の「外観 *gestalten*」に着目し、発展段階に従って分類を行う。自然現象を崇拝する「自然宗教」、自然現象の擬人化に基づく「神話的宗教」、神話体系がひとつの思想体系に彫琢された「教義的・哲学的宗教」、行動規範である戒律を生み出す「世界宗教」に分類される。

宗教学第二部 「宗教的人間に関する哲学」(狭義の心理学的＝生理学的研究)

【第一分野】宗教の構成要素(「本質 *het wezen*」)の解明

宗教という「注目すべき現象の根底にあるのは、空想か本能か、感情か意識か」という問いに答えることを課題とする。

「宗教のどの形式が宗教の本質を最も純粋に、そして最も完全に体现しているか、どれが最高の宗教か、どれが真の宗教かを決定することができるようになる」。

四つの「構成要素 *bestanddeelen*」⁽³⁸⁾(①神なるものの表象或いは概念、②崇拝の諸形式、③戒律・律法、④未来の待望)。

【第二分野】「宗教」の「起源」の解明

「宗教」がどのような心理的機制から生じているのかという問いへの解答⁽³⁹⁾。

【第三分野】実践的宗教学

「宗教がどのようにして涵養され、育成され、強化され、広められ、促進され、純化され、改革されなければならないかを知ることが出来るようになる」。

ここで、(ティーレ宗教学)がモダニズム神学や神学部の改革についての議論という文脈で構想されている事実に改めて目を向けてみるならば、「近代宗教学の祖」とされるティーレを宗教学史叙述から「解放」するためのひとつの契機が見出される。それは彼の謂う「宗教学第二部」の位置付け、つまり「宗教学」と「神学」との関連にある。

ティーレは、神学の中に従来包摂されてきた諸分野の中で、まず聖書釈義学は「純粋に文献学的な」科学であるとし、「新約聖書の諸文書は、旧約聖書の諸文書、クルアーン、ヴェーダ、ゼンド・アヴェスター、エッダ、その他どのような古典古代の文書であれ、それらと異なった方法で解明されるべきものではない」と、ミュラーを想起させる主張を展開する⁽⁴⁰⁾。また、イスラエル民族の歴史は神学者にとって重要な意味を持つものであるとしても、宗教学の一部と見なすよりも、通常の

歴史学の一部と考えるべきであると指摘する⁽⁴¹⁾。こうして、聖書釈義学とイスラエル史は厳密には彼の構想する神学、つまり宗教学には含まれないことになる。

しかし、ティーレが詳述しているのは寧ろ、護教論と教義学の位置付けである。彼は「古い意味での護教論や教義学等は感謝して教会共同体にお戻りする」⁽⁴²⁾とアイロニカルに述べているが、これはあくまでも「古い意味での」⁽⁴³⁾教義学の拒否であり、モダニズム神学の枠内で可能だと考えられている護教論や教義学の構想が彼の宗教学の中に一定の一しかも決して周縁的ではない一位置を占めていることは看過できない。事実、彼の宗教学が論じる様々な主題は基本的に、教義学殊にモダニズム神学的教義学が論じてきた主題に対応しているのである。彼の言葉によれば、宗教学は教義学を排除するものでは決してなく、後者には前者の中で相応の位置が与えられている。それは第二部第一分野、即ち「宗教的人間に関する哲学」の中の「本質」研究に他ならない。

上で略述したように、彼によれば「宗教」の「本質」は以下の四つ⁽⁴⁴⁾の「構成要素」から成る。①まず第一に、神的なるものの表象或いは概念であるが、そうした表象を通して人間は神性を知ることができる、とされる。彼によれば、この要素に着目すれば更に、多神教、二神教、三神教、一神教といった類型化や、汎神論、有神論、理神論、ナチュラリズム等の概念化が可能となる⁽⁴⁵⁾。②次にティーレが挙げるのが崇拜の諸形式である。彼によれば、これらの諸形式を通して人間は神的存在に到達し、またそれと合一することを目指す、とされる。③そして更なる構成要素として言及されるのが戒律・律法である。その遵守によって、人間は神のようになることを目指す、と解説されている。何故なら「人間は神性の似姿として神性のまねびに定められている」⁽⁴⁶⁾からである。④そして最後に、未来の待望が挙げられるが、ここでは終末論が想定されており、それと不死信仰が関連付けられている。このように、ティーレにおいて宗教の「本質」とされるものは、人間による神的存在についての知的認識、神的存在に至る為の行為形式、神的存在の経験、それによる人間の完成という段階的な過程として理解されている。そしてこれが以下で詳述するように、教義学的枠組みと対応関係にある点が、〈ティーレ宗教学〉の顕著な特徴なのである。

モダニズム神学の教義学がティーレ宗教学第二部第一分野構想の雛形になっていることは、彼自身が自らの宗教学と前述のモダニズム神学者スホルテンの『教義学』を以下の図のように対応させて理解している点に如実に現れている。

図 ヨアンネス・ヘンリクス・スホルテン『教義学』⁽⁴⁷⁾との対応関係⁽⁴⁸⁾

ティーレ宗教学第二部第一分野（本質研究）	スホルテン教義学*
① 神を知ろうとする試み（神的存在の表象と概念）	
a 宗教の対象としての神的存在への欲求	神論
b 人間と神的存在との中間的存在への欲求	キリスト論
c 人間が神の知識を獲得しようとする際の手段	靈感論，正典論，聖書論，真理論，秘儀論

② 神と共にあろうとする試み (神的存在との交わりの実践) [崇拜の諸形式]	
a 供儀, 祈祷等による交わりの維持	
b 罪, 侵犯等による交わりの断絶	
c 交わりの回復―回帰と贖罪―和解と服従	贖罪論, 救済論
③ 神としてあろうとする試み (宗教的道德) [戒律・律法]	
a 神的存在を模倣しようとする試み	
b 人間が神に由来することに基づく, 神的存在を模倣する能力―人間の本質と召命	宗教起源論, 人間論
④ 永遠に神と共に, そして神としてあろうとする願望―神を完全なものとして知ろうとする願望 (終末論―不死への信仰―宗教の勝利) [未来への待望]	終末論

*ティーレによれば, 第二部第一分野に相当しない教義学の諸主題は, 宗教学第一部に相当するか, 第二部第二分野に対応する。

そしてこのような対応関係に基づき, 「神学の科学的な構成部分の中で, わたしが構想している宗教学によって排除されるものはなにもない。そこで抜けているものは, 科学に属していない」だけであると宣言されるに至るのである⁽⁴⁹⁾。

〈ティーレ宗教学〉はこのようにして教義学を含み込むだけではない。宗教学第二部の課題は先に指摘したように, 第三分野の実践神学において完結すると考えられているのである。彼によれば, 宗教学は, 聴衆の宗教的感情に如何にして訴えかけるべきかといった説教学的洞察, 諸宗教の共通点を出発点として, 欠点を含む他宗教を「絶ち切るのではなく完成させるための, そして打倒するのではなく改革するための」対象と看做すことが出来るような宣教学的指針を与えてくれるとされる。そして最終的に, 以下の問いに答えることを可能とする価値判断の基準を提供してくれるという。即ち, 「教会を保持した教会を打ち立てていくべきか, 或いは自由で, 絶えず移り変わっていくような結社を選ぶべきか。規則に基づき整然とした宗教を実践すべきか或いは自由意思に基づいて集会を形成すべきか。信仰告白を作成するか或いは思想の完全な自由を認めるか」。ティーレの目からすれば, これは危急の問い (ではあるが既に答えが出ている問い) であり, それに答えられるのは, 科学となった神学, 即ち「宗教学」だけなのである⁽⁵⁰⁾。

3) 終わりに

こうした 1860 年代後半以降の〈ティーレ宗教学〉の構想と, 彼のライデン大学神学部「一般宗教学史」教授就任を可能にした 1876 年の新法とを比較してみれば, 彼の構想の核的な部分が実現していないことがわかる。様々な点で齟齬は見出せるが, 相違の一つは, ティーレが主張していた

「宗教そのもの一般の歴史 *de geschiedenis der godsdienst in het algemeen*」ではなく、「[個別諸宗教一般の歴史 *de geschiedenis der godsdiensten in het algemeen*」という科目が設置されたことである。この点は後の展開との関連からすると決して些細なことではない。一例のみ挙げておくと、ティーレと同時にアムステルダム大学神学部「一般宗教史」教授に着任したシャントピー・ド・ラ・ソーセイの主著『宗教史教本 *Lehrbuch der Religionsgeschichte*』⁽⁵¹⁾は 1887 年の初版における概念的かつ理論的考察を例外として、版を重ねるごとに、各民族別の個別宗教史の色合いを濃くし、同時に複数宗教の歴史的推移に関する情報提供的性格を強めていき、「宗教そのもの一般の歴史」の観点は失われていく⁽⁵²⁾。こうして、「宗教史」とは何を対象とし、何を素材とし、どのような方法によって叙述されていくべきものなのか、そしてこの「宗教」というのは個別の諸宗教なのか、「諸宗教一般」なのか、「(単数形の) 宗教一般」なのか等々といった問題における合意がそれ以後形成されることはなく、現在に至っている。そうした事態は、学問的宗教研究をどのように名付けるかといったこの学問の名称を巡る問題が現在に至るまで議論され続けていることとも密接に関連している。

もう一つの一決定的な差異を挙げておくと、それは上述したように、高等教育法において「教會的神学」として「科学」から切り離された教義学と実践神学の位置付けである。後の自己確認的宗教学史叙述が好んで引き合いに出す主張—オランダにおいては制度的に宗教学と神学が切り離され、非神学的・科学的宗教学が成立した—とは裏腹に、非科学的であると批判されがちなファン・デル・レーウ（ヤド・ラ・ソーセイ）のみならず、〈ティーレ宗教学〉においてさえも、（ファン・デル・レーウ等の場合とは別の意図からではあるが）教義学と実践神学とに構成的な重要性が与えられている。そうすると、従来の、「宗教学の神学からの独立」という歴史叙述上の語りを改めて問い直す必要が出てくる。

「宗教学の祖」と評されるティーレは、一方で、「経験に根拠を持たない思弁はすべて、演繹はすべて、外部の権威はすべて禁じられる。正確に観察し、比較する。立場に偏らず評価する。そしてそこから正当な結論を引き出す。これが、宗教学の使命であり、能力である」と宗教学の根本的立場を特徴付けている。その限り、確かにウィーベが指摘するように「科学性」を強調したことには否定の余地はない。けれども、この「科学性」は、当時のプロテスタント神学がその上に立てられるべきものと考えられた科学性であり、科学的時代の人間の信仰喪失を回避することを目指したモダニズム神学が根拠としていた科学性であり、そして何よりも、新たな教義学、新たな実践神学のための科学性であった⁽⁵³⁾。先の引用に引き続いて、ティーレは述べている。「いずれにせよ、こうして真の宗教が最もよく守られ、信仰が最もよく弁明されることになるのである」⁽⁵⁴⁾。

以上のように、〈ティーレ宗教学〉を、19 世紀における「科学」理解と「宗教」理解の狭間にあって、一方で、単数形の宗教を人間に共通した「宗教的感情」として救い出そうとするオランダ・モダニズム神学、他方で大学神学部の「科学的神学」への再編成という文脈の中に位置付けて見るならば、必ずしも「宗教学の祖」という特徴づけによって包括され得ないティーレの別の相貌—モダニズム的プロテスタンティズムを宗教の完成形態と看做す神学者ティーレの姿—が現れてくるのである。

参考資料

Cornelis Petrus Tiele 履歴と業績(以下の主要著作の殆どは、明記されていない場合でも英仏独訳されている)

- 1830: 生
- 1848-53: 古典主義的高等学校 (Athenaeum) とアムステルダムのレモンストラント兄弟団神学校で古典語と神学を修める (ヨハネ福音書研究)
- 1853-56: モールトレヒトで牧会
- 1855: 『イエス伝の資料としてのヨハネ福音書』
- 1855ff.: 雑誌『キリスト教年鑑』編集 (1862年まで)
- 1856-1873: ロッテルダムで牧会
- 1858-59: 『時代の徴』(オランダ最初のモダニズムの教会機関誌) 編集
- 1860: 「ライデン大学における宗教史 *de godsdienstgeschiedenis* 教育」『案内人』
- 1860: 「神学のための補助学問としての宗教学」『案内人』
- 1864: 『古代ペルシャ諸民族におけるザラトゥシュトラ教』
- 1866: 「神学と宗教学」『案内人』
- 1867: 『神学雑誌』創刊 (共同創刊者, 編集者)
- 1867: 「宗教学と神学」『神学雑誌』
- 1869: 『古代諸宗教の比較史』第一部第一分冊 (第二分冊は 1872 年。第二部は題名が変わって 1902 年)
- 1870: (モダニズム団体の)「オランダ・プロテスタント同盟」設立 (設立メンバー, 数期にわたり議長)
- 1871: 「宗教学の課題」『案内人』, 「宗教の本質と起源」『神学雑誌』
- 1872: ライデン大学名誉博士号 (神学)
- 1872: 『エジプト及びメソポタミアの諸宗教の比較史』
- 1873-1902: ライデンのレモンストラント兄弟団神学校教授 (後に学長)
就任講演「諸自然民族の[単数形の]宗教の宗教史における位置」(宗教学と神学との相互依存関係を説く)
ティーレの担当科目 (宗教学, 説教学, 修辞学, レモンストラント派の歴史)
- 1874: 「宗教の発展法則について」『神学雑誌』(旧来の神学の課題を引き受け, キリスト教の優越性を主張。モダニズム神学が人類の宗教へと発展していく希望)
- 1876: 高等教育法成立 (ライデン, アムステルダム, フローニンゲン, ユトレヒトの四神学部)に「一般宗教史 (諸宗教一般の歴史)」講座設置)
- 1876: 『諸世界宗教の支配に至るまでの[単数形の]宗教の歴史 *De geschiedenis van den godsdienst tot aan de heerschappij der wereldgodsdiensten*』
英訳 (*Outlines of the History of Religion to the Spread of the Universal Religions*, 1877)
独訳 (*C. P. Tiele's Kompendium der Religionsgeschichte. Ein Handbuch zur Orientierung und zum Selbststudium*, 1880. 1903 年以降, 『ティーレとゼーダーブロムの宗教史ハンドブック *Tiele-Söderbloms Kompendium der Religionsgeschichte*』の書名で有名となり, ゼーダーブロムの手で大幅な修正が加えられた版 (第三版以降) が流通, 1931 年には第六版)
仏訳 (*Manuel de l'histoire des religions. Esquisse d'une histoire de la religion jusqu'au*

- triomphe des religions universalistes*, 1885)
 邦訳 (『宗教史概論』(比屋根安定訳), 1960年 = *Outlines* の訳)
- 1877: ライデン大学神学部「一般宗教史」教授に就任 (同時にド・ラ・ソーセイがアムステルダムに就任)
 就任講演「諸宗教の比較史にとってのアッシリア学の成果」
 ティーレの担当 (一般宗教史, 1891年までは神論史も, 1891年以降は宗教哲学も)
- 1886f.: 『キュロスによるバビロン征服までのバビロニア・アッシリア史』
- 1888: ボローニャ大学名誉博士号授与 (文学)
- 1893: 『アレキサンダー大王までの古代宗教[単数]史』(1876年の『宗教の歴史』の改訂版)
- 1896: 「宗教学の諸要素第一部—形態論篇 *Elements of the Science of Religion. Part I: Morphological*」
 (ギフォード・レクチャー。97年に英語版出版)
 オランダ語原版『宗教学入門第一部 *Inleiding tot de Godsdienstwetenschap, Eerste Reeks*』, 1896年。
- 1898: 「宗教学の諸要素第二部—存在論篇 *Elements of the Science of Religion. Part II: Ontological*」(ギフォード・レクチャー。99年に英語版出版)
 オランダ語原版『宗教学入門第二部 *Inleiding tot de Godsdienstwetenschap, Tweede Reeks*』, 1898年。
 邦訳 (『チ氏宗教学原論』(鈴木宗忠・早船慧雲訳), 1916年 = *Elements* 上下巻の訳)
- 1900: 第一回宗教史国際会議 (パリ, ティーレとミュラーが名誉会長)
- 1901: 『宗教学概説』(ギフォード・レクチャーの要約版)
- 1902: 『古代の[単数]宗教史』第二部
- 1902: 没

* 本研究は JSPS 科研費基盤研究 (B)「宗教現象学の歴史の変遷と地域性に関する包括的研究」(JP16H03354 研究代表者 藤原聖子), 基盤研究 (C)「宗教学の生成とその展開に関する総合的研究」(JP16K02176 研究代表者 江川純一) の助成を受けたものである。

註

- (1) 以下, こうした名称で構想され, 営まれてきた宗教研究を包括的に, 宗教学と呼ぶこととする。
- (2) 拙論「境界への眼差しとしての近代ドイツ宗教史—「キリスト教」「ユダヤ教」「ドイツ宗教」の隙間—」(『ユダヤ教とキリスト教』, 日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録第 2 号, 2013 年), 38 - 66 頁を参照のこと。この戦略の中には勿論, 国民国家を前提としたナショナルな利害関心も入ってくるであろう。この点については以下を参照のこと。Arie L. Molendijk, “At the Cross-Roads: Early Dutch Science of Religion in International Perspective,” in *Man, Meaning, and Mystery. 100 Years of History of Religion in Norway. The Heritage of W. B. Kristensen*, ed. by Sigurd Hjelde (Leiden, Brill, 2000), p. 19.
- (3) D. Wiebe, “Phenomenology of religion as a Religio-Cultural Quest: Gerardus van der Leeuw and the Subversion of the Scientific Study of Religion,” in *Religionswissenschaft*

- und Kulturkritik*, ed. by H. G. Kippenberg and B. Luchesi (Marburg, Diagonal, 1991), pp. 65-86. 引用は 79 頁以下。
- (4) Eric J. Sharpe, *Comparative Religion. A History*, (London, Duckworth, 1986(1975)), p. 35.
 - (5) J. Wach, *Religionswissenschaft. Prolegomena zu ihrer wissenschaftstheoretischen Grundlegung* (Leipzig, Hinrichs, 1924), pp. 1-20. けれども, (後期) ヴァッハの宗教学は, 別種の自己確認的歴史叙述においては逆に, 「神学的」であると批判されるようになったことを忘れてはなるまい。例えば以下を参照のこと。Sharpe, *op. cit.*, pp. 275f.
 - (6) Louis Henry Jordan, *Comparative Religion: Its Genesis and Growth* (Edinburgh, T&T Clark, 1905), pp. 521ff. 引用は 522 頁。
 - (7) C. P. Tiele, *Inleiding tot de Godsdienstwetenschap. Gifford-Lezingen gehouden in de Universiteit te Edinburgh, 1. reeks, Nov. - Dec. 1896*, second revised ed. (Amsterdam, P. N. Van Kampen & Zoon, 1900 (1896)), p. 1 (C. P. Tiele, *Elements of the Science of Religion, Part I: Morphological, being the Gifford Lectures delivered before the University of Edinburgh in 1896* (Edinburgh, Blackwood & Sons, 1897), p. 2).
 - (8) C. P. Tiele, "On the Study of Comparative Theology", in *The World's Parliament of Religions, vol. 1*, ed. by J. H. Barrows (London, "Review of Reviews" Office, 1893), p. 586. これはシカゴ万国宗教会議上での名誉総裁としての発言である。ティーレはミュラーと共に本会議の名誉総裁に推挙されていたが, 二人とも参加が叶わず書面で挨拶文を読み上げさせている。
 - (9) 本稿との関連でもう一点のみを指摘しておく, ジョーダンが〈ティーレ宗教学〉への共感を至る所で表明しているが, シャープはティーレをミュラー, ゼーダーブロム, クリステンセンと並べて「比較宗教学の祖」であると述べている (Sharpe, *op. cit.*, p. 295) 一方で, ティーレについての具体的な説明は一切行っていない。これは, 1975 年時点では, 〈ティーレ宗教学〉がほぼ忘却されていたことの表れとも解釈出来ようし (ライデン大学におけるティーレの後継者クリステンセンについては, 同時代人であったということもあろうが, かなりのページ数が割かれている), また「オランダ宗教現象学」(ファン・デル・レーウ) によって凌駕されてしまった存在と捉えられていたとも考えられる。しかしこの点は, シャープの宗教学史叙述自体に関わる問題であり, シャープとシャープの時代を対象とした精緻な検討が必要となる。
 - (10) ここでは指摘するだけにとどめておくが, 極めて興味深いのは, 「宗教学の祖」とされるティーレ自身が描き出す「宗教学」史である。後述する C. P. Tiele, "Theologie," pp. 219ff.において, ティーレは 1866 年の時点からの (彼の理解するところの) 宗教学の歴史を叙述している。
 - (11) 本稿における後述の議論から察せられるように, これに加えて, キリスト教的文脈における〈ティーレ宗教学〉の位置づけは無視できないのであるが, 紙幅の都合上, ティーレのレモンストラント派理解と彼の構想する宗教学との関係については別稿に譲りたい。
 - (12) 誤解のないように念のため記しておくが, これは勿論, 宗教学を再神学化することを目的とするものでは決してなく, 宗教学史叙述の為のメタヒストリ的の眼差しを獲得する為の一つの実証的作業以上のものではない (但し, 宗教学の再神学化の目的の為に利用される可能性は排除できないが)。また, 本文においては〈ティーレ宗教学〉の歴史的な文脈の記述を中心とし, 彼

の「宗教学」及びその周辺の諸概念については主に註において指摘することとする。

- (13) Sharpe, *op. cit.*, p. 252. ティーレとの関連で言えば、プラットフォームはオランダの当時の宗教学は「学問的な自由主義神学の一部である」とまで断言している。Jan G. Platvoet, “The Science of Religion in Dutch Duplex Ordo Theology, 1860-1960,” in *NVMEN*, vol. 45, no. 2, 1998, p. 115.
- (14) 19 世紀におけるレモンストラント派の動向については以下を参照のこと。Tjaard Bernard, “Het verstoten kind tot de vrijheid geroepen. Ontwikkelingen binnen de Remonstrantse Broederschap in de tweede helft van de negentiende eeuw,” in *Documentatieblad voor de Nederlandse kerkgeschiedenis na 1880*, no. 20, Dec. 1997, pp. 3-22; Idem, *Van ‘verstoten kind’ tot belijdende kerk. De Remonstrantse Broederschap tussen 1850 en 1940* (Amsterdam, De Bataafsche Leeuw, 2006). また、ティーレに関する研究は、2002 年の没後 100 周年を契機にある程度進捗したが、宗教学史の文脈よりもプロテスタンティズム、レモンストラント派についての歴史研究の中で再評価が進んでいる。以下、本稿執筆に当たり参考としたティーレ論を、他の箇所では言及しないものに限り、ここで挙げておく。A. de Lange, “Tiele, Cornelis Petrus,” in *Biografisch lexicon voor de geschiedenis van het Nederlands protestantisme*, vol. 4 (Kampen, Uitgeverij Kok, 1998), pp. 421-424; W. B. Kristensen, “Tiele (Cornelis Petrus),” in *Nieuw Nederlandsch Biographisch Woordenboek*, vol. 4 (Leiden, A. W. Sijthoff, 1918), pp. 1332-1335; Arie L. Molendijk, “Tiele on Religion,” in *NVMEN*, vol. 46, no. 3, 1999, pp. 237-268; Idem, “Cornelis Petrus Tiele en de godsdienstwetenschap,” in *Geloof en Onderzoek. Uit het leven en werken van C. P. Tiele (1830-1902)*, ed. by E. H. Cossee, H. D. Tjalsma (Rotterdam, Stichting Historische Publicaties Roterodamum, 2001), pp. 23-41; Idem, “Theologie, kerk en academie in protestants Nederland,” in *Kerk en Theologie*, no. 58, 2007, pp. 4-21; Daniel Pierre Chantepie de la Saussaye, “Levensbericht Cornelis Petrus Tiele,” in *Jaarboek van de koninklijke akademie van wetenschappen*, 1902, pp. 125-154.
- (15) ドイツでは「自由主義神学」, 「ヘーゲル主義」, 「テュービンゲン学派」等の名称の下でダーフィット・フリードリヒ・シュトラウス, フェルディナント・クリスティアン・バウル, リヒャルト・ローテに、フランスではエルネスト・ルナンとオランダのワロン派教会の牧師であったアルベール・レヴィユ (後にコレージュ・ド・フランスの宗教史教授, *Revue de l'histoire des religions* 共同創刊者) に言及されることが多い。この運動はスイスでは「改革」の名の下で展開し、またイギリスでは急進派が「ユニテリアン」として登場し、のちに合衆国で花開くこととなる。以下を参照のこと。Mirjam Buitenwerf-van der Molen, *God van vooruitgang. De popularisering van het modern-theologische gedachtegoed in Nederland (1857-1880)* (Hilversum, Uitgeverij Verloren, 2007), pp. 17ff.
- (16) 一方で、伝統的な信仰告白に基づく信仰の継承を重視し、超自然主義的立場に立つ正統主義陣営の一部は、19 世紀を通してオランダ改革派教会内部で分離主義的傾向を示し続けた。1834 年、1886 年に実際に分裂が生じ、20 世紀に入っても、保守的立場の重要性を主張し続けた。また、モダニズム運動内部においても、近代科学と宗教との一致を目指す立場に科学主義的な

偏向を感じた陣営が、「倫理的モダニズム」と称して伝統的モダニズムとは一線を画し、個人的信仰の可能性を担保しようとする方向で論陣を張った。後の宗教学者ピエール・ダニエル・シャントピー・ド・ラ・ソーセイの父ダニエルがこの倫理的方向における有力な神学者であったが、子ピエール・ダニエルもそしてファン・デル・レーウも倫理的モダニストであり、ティーレのモダニズムとは異なり、神学的に保守的(教會的)傾向が顕著である。Buitenwerf-van der Molen, *ibid.*, pp. 29ff., 110ff.; Herman J. Selderhuis (red.): *Handboek Nederlandse Kerkgeschiedenis* (Kampen, Uitgeverij Kok, 2006), pp. 660ff. (モダニズムにおけるティーレの位置については 667 頁以降を参照のこと)

- (17) この考えには、自由主義プロテスタンティズム・モダニズム的な宗教理解の特徴が如実に現れており、この点ではマックス・ミュラーも同様である。そしてこれは、自由主義神学が必ずしも同調しない、ヘーゲル主義神学の特徴でもある。即ち、キリスト教神学の中のプロテスタント神学、その中でも自由主義・モダニズム神学(プロテスタント教会ではない!)がとりもなおさず、「宗教」史の近代的展開において漸く「到達」し得た、「完成」した「宗教」の「最終」にして「最高」の形態、つまり「真の宗教」の実現形態(教会制度の軽視・否定、自由意志と思想の自由の重視に基づく宗教)である、という理解である。こうした理解をティーレも共有している。C. P. Tiele, “Over de wetten der ontwikkeling van den godsdienst,” in *Theologisch Tijdschrift*, vol. 8, 1874, p. 262. 但しティーレの場合にはその「宗教」の完成形態が、「宗教学」構想と連動していることが大きな特徴であることは以下、本文で詳述する。
- (18) C. P. Tiele, “Brieven over den Bijbel,” in *De teekenen des tijds*, vol. 30, 1859.
- (19) Otto J. de Jong, “De Wetgeven van 1876 en de Theologie,” in *Nederlands archief voor kerkgeschiedenis*, Nieuwe Serie, vol. 48, no. 2, 1968, pp. 316ff.
- (20) De Jong, *ibid.*, p. 324.
- (21) ド・ラ・ソーセイのこうした職歴は、彼の宗教学理解と決して無関係ではない。前述したように、ド・ラ・ソーセイの正統主義的ではないにせよ、決してリベラルではないオランダ改革派教會的教派性は、宗教学をプロテスタンティズムの近代的護教論に仕立て上げていることも忘れてはならない。この点では、ド・ラ・ソーセイからファン・デル・レーウ(そして彼の後任であるヘントリック・クレーマー)へと繋がる「オランダ宗教学」が教會神学的性格を帯びていることは否めず、ウィーベのレーウ批判を無下に退けることも出来ない。この傾向は 1897 年にストックホルムで開催された(国際)宗教学会議でのソーセイの基調講演に現れている。そこで彼は、宗教学を誤解の余地なく、プロテスタント的教派性に基づく営みであると規定している。Pierre Daniel Chantepie de la Saussaye, *Die vergleichende Religionsforschung und der religiöse Glaube* (Freiburg i. Br., J. C. B. Mohr, 1898).
- (22) この時期は、彼がロッテルダムの牧師として活動しつつ、兄弟団の枠を越えてオランダ・プロテスタンティズム内部のモダニズム運動においても指導的学者の一人となっていく時期に相当している。彼は既に 1858 年以降、オランダ改革派教會の自由主義的同志と共に神学雑誌を幾つか共同で編集していたが、彼の協働者には、先述したオランダ改革派教會のヘブライ語聖書学者アブラハム・キューネンを始め、当時影響力を有していた殆どのモダニストが属している。こうしたモダニズム神学者として神学界の表舞台に登場したティーレは、1837 年に進

- 歩主義的・政治的自由主義的雑誌で、モダニズム神学者も関与していた文化批評・文芸批評誌『案内人 *De Gids*』と、彼自身が創刊者の一人として関わった 1867 年発刊のモダニスト的『神学雑誌 *Theologisch Tijdschrift*』（1870 年にモダニズムの「オランダ・プロテスタント同盟」が設立してからは同盟の機関誌）を中心に、モダニズム神学と宗教学について精力的に発言していく。『神学雑誌』の宗教学史的意義については以下を参照のこと。Jordan, *op. cit.*, p. 404.
- (23) C. P. Tiele: “Het onderwijs in de godsdienstgeschiedenis aan de Leidsche Hoogeschool,” in *De Gids*, vol. 24, 1860, p. 816. オランダ・プロテスタンティズムに関する代表的な人名事典 (A de Lange, *op. cit.*, p. 424) には、ティーレはこの論考で、「神学部において独立した分野として比較宗教学を導入することを積極的に主張した」とされている。しかし、この論考についてのこのような評価は、寧ろ宗教学の自己確認的歴史叙述に規定されており（「独立した」、「比較宗教学」）、〈ティーレ宗教学〉の同時代的文脈が考慮されていない。
- (24) この「(単数形の) 宗教の歴史」・「諸宗教の比較史」構想は、60 年代末以降には、彼の専門であるオリエント宗教史の分野で萌芽的に纏められ (C. P. Tiele, *Vergelijkende geschiedenis der oude godsdiensten. Eerste deel: De egyptische en mesopotamische godsdiensten* [古代諸宗教の比較史 第一部—エジプトとメソポタミアの諸宗教] (Amsterdam, P. N. Van Kampen, 1869)), 更に 90 年代のギフォード・レクチャー (*Elements of the Science of Religion*, 2 vols. (Edinburgh, Blackwood & Sons, 1897, 1899) = *Inleiding tot de godsdienstwetenschap*, 2 reeksen (Amsterdam, P. N. Van Kampen, 1896, 1898)) においてより明瞭な形で提示されることになる。
- (25) 1866 年に先述の『案内人』誌上に、「神学と宗教学」と題する論考が公にされる。C. P. Tiele, “Theologie en godsdienstwetenschap,” in *De Gids*, vol. 30, 1866, pp. 205-244. 翌年には、今度は単語の順番を逆にした「宗教学と神学」と題する論考を世に問うが、これは彼自身が共同編集者であった『神学雑誌』誌上に掲載されたものである。C. P. Tiele, “Godsdienstwetenschap en theologie,” in *Theologisch Tijdschrift*, vol. 1, 1867, pp. 38-52. 以下では、前者は“Theologie”と、後者は“Godsdienstwetenschap”と指示する。
- (26) “Theologie,” p. 212.
- (27) *Ibid.*, p. 213.
- (28) *Ibid.* ティーレは、シュライエルマッハーが神学の特徴付けとして好む「実証的 (実定的) 科学」という表現自体が、概念的な不正確さを暴露しており、神学の「根本的な貧困」を露呈していると主張する。何故なら、科学とは常に実証的であるからであり、つまるところ、「神学的科学なるものは存在せず、ただ科学的神学があるのみである」(*Ibid.*, p. 215)。こうしたティーレの主張は一方で、19 世紀後半の知的状況において「科学的・学問的 *wetenschappelijk/wissenschaftlich*」及びその周辺概念が帯びていた一定の意味論を想起させる。例えば神学に関して言えば、「科学的・学問的」を冠した以下の二つの雑誌 (同名であるが別の雑誌である) において神学の「学問性」が殊更に強調されている。“Vorwort,” in *Zeitschrift für wissenschaftliche Theologie*, vol. 1, 1826, p. iv; A. Hilgenfeld, “Die wissenschaftliche Theologie und ihre gegenwärtige Aufgabe,” in *Zeitschrift für wissenschaftliche Theologie*, vol. 1, 1858, pp. 1ff. また、新カント派の雑誌

- Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie* (1877-1901)における wissenschaftlich は、ヘーゲル主義の思弁的傾向に対する実証主義的方向性を指示する概念でもあった。
- (29) “Theologie,” p. 216. 例えば、ヘーゲル主義神学者の一人は、思弁的神学こそが「[単数形の]宗教学そのもの die Wissenschaft der Religion an und für sich」であると主張している。Karl Rosenkranz, *Encyklopädie der theologischen Wissenschaften* (Halle, C. A. Schwetschke und Sohn, 1931), p. 3.
- (30) “Theologie,” pp. 217f.
- (31) Ibid., p. 227.
- (32) Ibid. この点で、宗教者の意識が向けられる対象（「神」）の分析を不可欠なものとなすソーセイ以後のオランダ宗教学との差異が明瞭に見て取れる。以下を参照のこと。Platvoet, op. cit., pp. 122ff.
- (33) “Theologie,” p. 229.
- (34) Ibid., p. 230.ここではミュラーの *Lectures on the Science of Language*, vol. 1 (London, Longman, 1861), pp. 36ff.を引き合いに出して、「物理的 (fyzisch) 科学」性、そして「歴史的变化」(歴史学)と「自然的成長」(自然科学)の区別等のミュラーの所説を紹介しつつ、宗教学の「自然科学」性が論じられている。ミュラーの「成長」概念と「自然科学」理解については、以下の拙論を参照のこと。久保田浩「宗教学序説―王立研究所で行われた四つの講義」(フリードリヒ・マックス・ミュラー (松村一男・下田正弘監修)『比較宗教学の誕生』, 国書刊行会, 2014年), 567 - 568 頁, 註9。
- (35) “Theologie,” p. 232. この表現は、ユダヤ・キリスト教について語られている箇所で見えてくる。つまり、ユダヤ教の「自然的成長」の果ての完成形態としてイエスの宗教が捉えられている。ここでマタイによる福音書 5 章 17 節の「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」(新共同訳)を引き合いに出し、ユダヤ教の「律法」の「完成」を宗教発展の「法則」と読み替えている。
- (36) ティーレの「(宗教) 哲学」概念の使用もそれ自体、検討に値する問題である。特に、同時代人であるドイツのプロテスタント哲学者オットー・プフライデラー (O. Pflleiderer) やオランダのモダニズム神学者ラウヴェンホフ (L. W. E. Rauwenhoff) らによる、宗教史研究に裏打ちされた「宗教哲学」の構想との関係は無視できないであろう。そこでは歴史研究を強調することによって、思弁的ではない営みであることが強調されていた。例えば以下を参照のこと。Volkhard Krech, *Wissenschaft und Religion. Studien zur Geschichte der Religionsforschung in Deutschland 1871 bis 1933* (Tübingen, Mohr Siebeck, 2002), pp. 87f. 先述のように、ティーレ自身ライデン大学で「宗教哲学」を講じており、ギフォード・レクチャーの要約版として晩年に出版された C. P. Tiele, *Grundzüge der Religionswissenschaft* (Tübingen, J. C. B. Mohr, 1904)(本書は C. P. Tiele, *Hoofdtrekken der godsdienstwetenschap* (Amsterdam, P. N. Van Kampen, 1901)の独訳。論者はオランダ語原本を現在までのところ未見)において、「宗教学」は「宗教哲学」と同一視されている。
- (37) 以下は次の箇所の要約である。“Theologie,” pp. 236-241.
- (38) 「本質」を「構成要素」から成るものとして捉える仕方は、後の宗教現象学 (ファン・デル・

- レーウ、G・メンシング等)において試みられた宗教現象の類型化の雛形と看做し得よう。但し、こうした類型構築はハイデガー現象学の言語使用に即して言えば、「何か」としての「本質」概念を前提としており、「どのようにして」を問う視座は第二分野の「起源」（これは時間的・歴史的起源ではない）研究における「心理学」の課題とされている。後者の方向性は、類型論構築を行わなかった、或いはそれにさほどの重要性を認めなかった宗教現象学（R・オットー、M・エリアーデ等）においては、宗教の現象の「どのようにして」（ある現象を宗教現象たらしめる構造）としての「本質」理解に繋がっているように思われる。いずれにせよ、宗教学（特に宗教現象学）における「本質」概念の再検討は必至である。
- (39) “Theologie”では宗教の起源を「宗教的感情」或いは「信仰」と名付けているが、後にこの点を詳述し、フォイエルバッハの投影説を逆転させた形で、人間に内在する「無限なるもの」と呼び直している。C. P. Tiele, *Inleiding, Tweede reeks*, 1898, pp. 201ff. (= *Elements*, vol. 2, 1899, pp. 230ff.). マックス・ミュラーの「無限なるもの」理解との関係が問われる点である。
- (40) “Godsdienstwetenschap,” p. 40.
- (41) “Theologie,” p. 243; “Godsdienstwetenschap,” pp. 40-42.
- (42) “Theologie,” p. 243.
- (43) ティーレによれば、拒否されるべき「古い意味の」教義学とは、まず教会の教えの体系化であり、教会の教えに基づいて抽出される聖書の教えの体系化であり、そして「聖書箇所で美しく飾られた、霊的で、半分はプラトン主義的で半分はアレクサンドリア[新プラトン]主義的哲学」の謂いである。これは、外在の権威に依存しており、また宗教的な信仰告白そのものである故に、科学ではない。けれども教義そのものは「人間の宗教的意識の表明であり、……科学はそれらをただ探求し、批判的に比較し、理性が経験を通して教えてくれたものを根拠に検証する。科学は、経験から、宗教的人間がそれに従い宗教がそれに支配されているところの諸法則を導き出すにもかかわらず……なんらかの宗教やなんらかの宗教形式を産み出したり、宗教的思想を創り出したり、人間を宗教的にしたりすることはできない」（“Godsdienstwetenschap,” p. 42）。
- (44) “Godsdienstwetenschap,” p. 44 では三つと述べられるが、p. 47 に四つ目が出てくる。
- (45) *Ibid.*, pp. 44-46. ティーレの宗教類型論を構成する基本的諸概念は、M・ヴェーバーによって受容されている。Hans G. Kippenberg, “Religionsentwicklung,” in *Max Webers »Religionssystematik«*, ed. by Hans G. Kippenberg and Martin Riesebrodt (Tübingen, Mohr Siebeck, 2001), pp. 90ff.; *Idem*, “Einleitung,” in *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 22: Wirtschaft und Gesellschaft, Teilband 2: Religiöse Gemeinschaften*, ed. by Hans G. Kippenberg (Tübingen, Mohr Siebeck, 2001), pp. 54ff.
- (46) *Ibid.*, p. 47.
- (47) J. H. Scholten, *Dogmatices christianae initia*, editio secunda (Lugdunum Batavorum, P. Engels, 1856 [1854?]).
- (48) “Godsdienstwetenschap,” pp. 48-50 に基づき論者が表にした。
- (49) “Godsdienstwetenschap,” p. 52.
- (50) “Theologie,” p. 242. この主張については特に、ティーレのレモンストラント派所属との関連

が問われて然るべきであろう。当時は、少数派の「集会」として存続するべきか、17世紀にそこから訣別させられたオランダ改革派教会に復帰すべきかを巡って、レモンストラント兄弟団内部で論争が繰り広げられていたが、ティーレを中心としたモダニスト達が主導権を握り、前者の路線、とりわけ近代科学と親和度の高いモダニズムの体現としてのレモンストラント派独自の存在意義（「自由」の体現者という自己理解）が喧伝されていった。Bernard, “Het verstoten kind,” pp. 15ff.を参照のこと。

- (51) 以下の二版を比較してみればこの点は明白である。Pierre Daniel Chantepie de la Saussaye, *Lehrbuch der Religionsgeschichte*, vol. 1 (Freiburg i. Br., J. C. B. Mohr, 1887); Idem (ed.), *Lehrbuch der Religionsgeschichte*, 2. völlig neu gearbeitete Aufl., vol. 1 (Freiburg i. Br., J. C. B. Mohr, 1897). 1905年の第三版では理論・方法論編が更に削減されている（が、後述するように、歴史叙述の頁数は増大している）。
- (52) こうした情報提供的個別宗教学史叙述は、同時代のドイツのプロテスタント神学者アドルフ・フォン・ハルナックによって痛烈に批判されている。1901年に行った学長就任講演「神学部の課題と一般宗教学史」（これは、ドイツにおける一般宗教学史講座設置に異議を唱える内容で、ドイツにおける宗教学の制度化を遅らせることとなった原因として、宗教学史において繰り返し否定的に言及される講演である）においてハルナックは、「一般宗教学史」は、個別諸宗教に関連する諸言語と歴史の研究を中核とするものであり、あらゆる宗教の理解の為に関連諸言語と関連諸地域の歴史についての研究を全て神学部の中に設置することは現実的に無理であり、一方、そうした言語的かつ歴史的研究を前提としないような情報提供的「宗教学史」は、「救いようのないディレッタンティズム」であると断言している。Adolf von Harnack, “Die Aufgabe der theologischen Fakultäten und die allgemeine Religionsgeschichte nebst einem Nachwort,” in *Adolf von Harnack als Zeitgenosse. Reden und Schriften aus den Jahren des Kaiserreiches und der Weimarer Republik, Teil 1: Der Theologe und Historiker*, ed. by Kurt Nowak (Berlin, De Gruyter, 1996), p. 804. またこの講演についての補足論考で彼は、「一般宗教学史」が行っている多様な情報の単なる蒐集によって宗教学史に対する興味が生まれる訳でも、それが強まる訳でもない指摘した上で、ド・ラ・ソーセイの『宗教学史教本』を通読出来た人には敬意の念を表すと、その情報提供的・羅列的叙述を揶揄している。Ibid., p. 819. 因みに、ハルナックが入手したと思われる1897年の第二版は、各個別宗教学史叙述が並置されており、総頁数約420、1905年の第三版に至っては570頁を超えている。
- (53) ティーレの「宗教学」＝「モダニズム神学」を、非「宗教学」的と言うか、「神学」の換骨奪胎と言うかは、そのように特徴付ける観察者の「宗教学」並びに「神学」理解に依存する。いずれにせよ、本稿にとって重要な視点は、こうした自己或いは他者についての理解の幅に応じて、宗教学史叙述の複数性が生まれてくる、という点にある。
- (54) “Godsdienstwetenschap,” p. 52.